

アフリカ体験記

特許審査第四部部長 櫻井 孝

2008年は1月から4月まで毎月1週間乃至10日の海外出張が入ったが、中でも4月の南部アフリカ3カ国訪問は自分でも初めてのアフリカ体験であり、このせっきくの経験を何かに書き留めたいと思った。アフリカに行ってみると、予想どおり見ることも聞くこともみんなめずらしく、また出張用務での訪問先も3カ国合計で20余カ所にもなったため、行く先々で手書きで書きためた日記の分量はほぼノート1冊分になってしまった。飛行機に乗っている時間や空港での乗り継ぎの待ち時間、ホテルでの待機時間（とにかくホテルからは一歩も出るなど言われた）など、ノートに向かう時間は十分にあったのである。その手書きの日記を帰国後に一旦そのまま電子化してみたところ、ワード文書で50ページにもなった。そこから、訪問先の相手国政府機関とのやりとりに関することなど、本来公にすることができない内容を削除し、さらに撮りためた写真と組み合わせて、読み物として再構成してみたのがこの「体験記」である。滞在期間が短かったから、極めて限られた体験に基づく記録でしかないのだが、帰国後に多くの方からアフリカ出張がどうであったか聞かれたこともあり、会員のご参考にもなればと願ってここに寄稿するものである。

【目次】

- ・序章 アフリカ出張に至るまで（ハンガリー、トルコ、ヨルダンなどの思い出）
- ・アフリカ出張の際の手荷物
- ・「Enter at Own Risk」と入口に明記している国際空港
- ・ホテルからは一歩も出るな
- ・アフリカの大地
- ・アフリカの街並み
 - (1)ウガンダの首都・カンパラ
 - (2)南アフリカの玄関・ヨハネスブルクと首都・プレトリア
 - (3)ザンビアの首都・ルサカ
- ・アフリカの現地の料理
- ・最後に

序章 アフリカ出張に至るまで （ハンガリー、トルコ、ヨルダンなどの思い出）

インド在勤時代から一度はアフリカに行ってみたくて願いつつこれまで一度も果たせなかった。それが全く思いがけないところからアフリカに出張することになった。それもいきなり南アフリカからウガンダ、ザンビアである。思い起こせば、インド在勤時代や国際課長時代を通じてこれまでに27カ国の土を踏んでいるものの、アフリカは一度もなかったし、南半球に足を踏み入れることもなかった。それが一度に両方とも達成されるのである。大変うれしいはずながら、やはりアフリカ初心者にいきなりウガンダ、ザンビアは厳しい気がしてならない。アフリカ出張に至るまでには2008年が明けたところからいろんなことがあった。

2007年の暮れも押し迫った頃、いきなり四部長室に国際課長が訪ねてきて、年明け早々に海外出張に行ってくれとのこと。聞けば、行き先はトルコ、ハンガリー、ポーランドだ。出発日は1月8日。7日の午後に四部職員約400名を集めて年頭訓辞を述べたあと、その翌日に出発という慌ただしさ。アポの関係で、まずはハンガリーのブダペストに入り、次にポーランドのワルシャワ、最後がトルコ（イスタンブールからアンカラ入り）であった。各国で特許庁を訪問し、精力的に用務をこなした。いずれの国の特許庁も日本特許庁からは初めての公式訪問ということで、それぞれに長官が対応してくれ、歓待してくれた。

で、国際課長から2月も出張してください、と言われたのは1月の末、出発までわずか2週間前というところであった。2月12日に出発。このときは、トルコの首都アンカラのホテルに真夜中の1時にチェックインし、翌日朝からトルコ特許庁主催の国際シンポジウムに出席して自分のスピーチを行いつつ、合間を見てトルコ政府関係者と会談し、その日の夜にはアンカラからトランジット泊地のイスタンブールに飛ぶ、という慌ただしさであった。



ハンガリー特許庁



トルコ特許庁での国際シンポジウムにて(左端が筆者)



ルーマニア特許庁(左側の建物)

た。イスタンブールは宿泊だけで、翌日早朝ルーマニアに移動、首都ブカレストでルーマニア特許庁を訪問し、17日には早々に帰国した。

トルコ特許庁のシンポジウムでは、トルコ特許庁の職員が総出で受付や案内係の仕事を担当していたが、受付のテーブルに集まった女性10人程からさかんに笑顔を向けられる。おう、けっこう歓迎されているんだなあとか思っていたら、我々のアテンドをしてくれた男性職員が、トルコでは日本や韓国の映画の人气が高く、そのせいで日本人や韓国人の男性はととてももてるんだとのこと、あなたはトルコ特許庁来訪が2度目だし特に人气が高いんだ、と笑って教えてくれた。

ブカレストはチャウシェスク時代に歴史ある古い建物を壊してしまったとのこと、雪の舞う冬景色も手伝って寂しい感じの街であった。ブカレストには2月14日に入ったが、ちょうどバレンタインデー。バレンタインデーで活気づくのは日本だけと思っていたら、当日の夜はルーマニアでも恋人同士、あるいは夫婦で外に出て食事をするというのが流行だそうで、街中のレストランはどこもカップルの予約でいっぱい。出張者の男3人(国際課の山下室長、JETROデュッセルドルフの北村調査員)で食事のできるところを探して夜のブカレストの街を延々とさまよったことや、ブカレストを発つ前の晩は大雪になり、

翌朝夜明け前に飛ぶはずの我々の飛行機が予定通りに飛ぶのだろうかと心配したのも、今となっては懐かしい思い出である。

2月の出張から帰国して、これでもう海外出張は終わりだと思った。しかし、でも何か引っかかるものがあった、旅行用のスーツケースは自宅の納戸にはしまわないでそのまま廊下に出しっぱなしにしておいた。そしたら、また3月になっていきなり国際課長がやってきて、また出張に行ってくれと言う。今度は中東方面だとのこと。イエメンというような国名もどこからか聞こえてきたので、イエメンにイケメンとか自分一人で馬鹿なことを言っているうちにイエメンの件は沙汰やみとなり、オランダ、ブルガリア、ヨルダンに行くことに決まった。

出張用務の方は、1月、2月と比べてもかなり厳しいものとなった。プレッシャーに押し潰されそうなか、ブルガリア特許庁を訪問した際には、庁舎の玄関前の片隅に

薄汚いワンコがチョココンと座っていた。我々が玄関に近づいて行ったら、そのワンコがのっそりと起きあがって近づいてきた。そこにいた守衛さんに「このイヌは特許庁で飼っているんですか?」と聞いたところ、笑いながら「我々のセキュリティ・システムです。」との答えが返ってきた。長官との会談を終えて再び玄関に戻った時には、既にそのセキュリティ・システム君はどこかにいなくなっていた。「彼はどうしたんですか?」と聞いたら、たぶんお昼ごはんを食べに行っただけでしょう、との答えだった。そういう何気ないユーモアに心が和んだ。

ヨルダンとはとにかく驚くことばかりだった。首都アンマンの空港に近づくにつれて飛行機が高度を落としていったが、地上を見れば見渡す限りの赤茶けた土漠である。草木1本も生えていない。水の流れた形跡はあるが、干上がっている。火星の景色ってこんなじゃないかと、

飛行機の窓にずっと顔を貼り付けていた。また市内の街並みは、真っ白い石造りの家がびっしり建ち並ぶという、他のどの国でも見たことのない異国情緒にあふれた光景であった。

4月に入り、またまた国際課長が部長室にやって来て、今度はアフリカに行ってくれと言う。行き先はウガンダ、南アフリカ、ザンビア。急いで黄熱病とその場での医師の勧めでA型肝炎の予防接種を受けた。黄熱病の予防接種は受けてから最低10日かからないと免疫ができない。ギリギリのタイミングで出発だ。成田空港を21日の17時に出て、最初の訪問国であるウガンダのエンテベ国際空港に着くのは現地時間の22日19時、実に32時間の長旅である。3つの飛行機を乗り継ぐが、機内にいる総時間は22時間、乗り継ぎ待ち時間が2回合わせて10時間、やはりアフリカは遠いのである。

アフリカ出張の際の手荷物

アフリカに行くに当たっていろいろと調べてみると、荷物は機内預けにしない方がいいと聞く。空港のカウンターで荷物を預けると、相当な高確率で荷物がなくなったり中身の盗難にあたりするとのこと、仕方なく、スーツは最初から着ていき、ほかはすべて機内持ち込みの手荷物だけで乗り切ることにした。足かけ10日に亘る出張を機内手荷物だけで乗り切るとするのはきついが、荷物



ブルガリア特許庁の前にて 玄関前の隅にワンコが座っている



ヨルダン・アンマン空港近くの土漠



ヨルダンの首都アンマンの街並み



がなくなるよりはましである。しかし、出張に発つ3日ほど前になって今度は、機内に大きな手荷物を持ち込もうとすると搭乗ゲートのところで空港職員に取り上げられ、それっきり出てこなくなる危険が高いという話を小耳に挟んだ。自分の持っているキャリーバッグは、以前海外出張の際に機内に持ち込んだ経験はあるものの、本当は機内持ち込みが許されるサイズよりも数センチ大きめらしいので、ひょっとしたら搭乗ゲートで取り上げられてしまうかも知れない。これではいったい荷物はどうしたらいいのか……。あれこれ悩みつつ、横浜近辺のカバン屋さんを片っ端から見て歩いた末に、結局当初の考え通り、手持ちのキャリーバッグで乗り切ることに決めた。あとは搭乗ゲートで何を言われても、四の五の言いながら手荷物の持ち込みをお願いし通すしかない。

で、以下は実際に出張中に体験した話である。思い返せば今回の出張の中で一番緊張した場面だった。

最初の訪問国ウガンダを発って次の南アフリカに移動するときのことだ。朝は3時45分に起床。ホテルから真っ暗な中を車をとばして空港に向かう。エンテベ国際空港に到着し、出国手続きを済ませてさっさと出発フロアに入る。手荷物のX線検査と身体検査を受けて、さあ、搭乗ゲート前の待合室に入ろうとしたところ、南アフリカ航空の担当者が待合室の前に机を出して座っていて、航空券のチェックをしながら乗客の荷物を見ている。緊張

しながら前の人に続いて素速く通り過ぎようとしたとたん、自分のキャリーバックを見て、これは大きすぎるから機内には持ち込めない、と言う。おう、そら来た！これが日本を出国する前に聞いていた「搭乗ゲート手前で手荷物を取り上げられる」ということなんだな、と理解する。

内心「やばいなあ」と冷や汗かきながら思いっきり愛想笑いして、自分は大きいとは思わないですよ、とか、他の空港でそんなこと言われたことはないですよ、とかあれこれ言ってみたものの、担当者は「It's big! (大きい!)」としか言わず、退く気配を見せない。自分の後ろにはどんどん他の乗客の列ができるし、同行した国際課の福田補佐とは離れてしまっているので助けを求めるわけにもいかない。仕方なく担当官に、ここまで来てこのキャリーバッグをどうしろって言うんだい？と聞いたところ、とりあえず待合室内で待っているとのこと。アフリカまでの長旅の疲労と睡眠不足とから来る頭痛が激しくなるし、ここで荷物を紛失したらこのあとが仕事にならないから心配だし、あれやこれやで待合室内でぐったりしていると、先ほどの担当官がやってきて自分のキャリーバッグに荷物タグを取り付け、そのタグの半券を自分に手渡して航空券に貼り付けて持っていると言う。キャリーバッグは別の担当官がピックアップに来る、とのこと。担当官殿は淡々と自分のお仕事をこなしている。

やれやれ困ったことだと思っていると、ほどなくして、乗客は搭乗口に移動せよとのコールがあったので、他の乗客と一緒に搭乗口への階段を降りる。入国時と同様に歩いて飛行機に乗り込むのかと思ったら、そこにはバスが待っていて、まずはみんなそれに乗り込む。その辺りでキャリーバッグをピックアップされるのかと半ば観念していたのだが、誰も自分を呼び止めないのをいいことにそのままキャリーバッグを持ってさっさとバスに乗り込んでおとなしくしている。見ていたら、そのうちに何人か南アフリカ航空の担当官が荷物に付けるタグを持ってバスの乗り込み口前に出てきたが、こっちから首を差し出すこともあるまいとそのままじっとしていた。

この頃から急に雨が降り出す。バスが動き出して、飛行機のタラップ下に着いたときには横殴りの暴風雨になっていた。だからタラップの下には空港職員も誰もいない。乗客はみんな競い合うようにタラップを駆け上っ



大雨のウガンダ・エンテベ空港 神様のおかげか

て機内に入る。当然に自分はキャリーバッグを持って機内に飛び込むが、そこまで来るともう誰も何も言わない。雨に助けられたかたちだ。さっさと自分の席に行き、棚にキャリーバッグを押し込み、あとは頭痛がひどいこともあって死んだ振りをして寝ていた。

そう言えば、日本を発つ前に旅行代理店の人から、途上国で飛行機を利用するときは、一度座席に座ったらあとは死んだ振りをしてでも絶対に動くな、とアドバイスを受けた。キャビンアテンダントなどに声をかけられて座席を立ったら最後、ダブルブッキング状態の別の乗客に席をとられたりして、ろくなことはないそうだ。

とにかく、意志のあるところ何とかなるものなのか、あるいは守護霊が守ってくれたのか。結果としてみれば、8日間アフリカに滞在したなかで、雨が降ったのはまさにこの瞬間だけだった。飛行機のドアが閉められたときにはホッとした。途上国の出張は、こういうつまらないところでの気苦労があって、それが本来の業務以上につらいのである。

「Enter at Own Risk」と入口に明記している国際空港

アフリカに行くに際して一番驚いたアドバイスが、空港では絶対に現地通貨への両替をするな、であった。曰く、悪人がどこかで見ていて空港外の仲間に連絡し、空港からホテルに向かう途中で車を待ち伏せして襲われる、大使館の車も被害に遭っている、とのことだ。ウィキペディアで見ても、特に南アフリカのヨハネスブルク

は「世界最悪の犯罪都市」と太字で書いてある。

結局3カ国を回って現地通貨を手にしたのはザンビアだけであった。ウガンダは滞在期間が1日しかなく、そもそも交換するようなひまがなかった。南アフリカは3日ほど滞在したが、空港では両替すると言われていたし、ホテルについたらこれまたレセプションが小さく両替ができない。結局は一緒に行動してくれた大使館の人に全て立て替えてもらい、最後にまとめて米ドルで精算させていただいた。シェラトンやヒルトンのような大きなホテルに泊まればホテルで両替も可能なんだろうが、そうでない場合はどうしたらいいのだろうか。福田君は成田空港で日本円を南アフリカ・ランドに交換して持ってきたとのことであった。よくもまあ成田の千葉銀行の窓口以南アフリカの通貨があったものだと感心するが、南アフリカまで来てしまうとたとえ両替ができたとしても日本円からの交換はできず、米ドルからの交換になってしまうこと、また安全面での問題も回避すべきことなどを考え合わせると、南アフリカの通貨の場合は成田で交換してくるのが案外正解かも知れない。ザンビアはホテルの会計窓口で両替した。交換レートは悪くなるが仕方がない。

ところで、南アフリカのヨハネスブルク空港に着いた時のこと。入国審査を済ませて駐車場に行き、一旦荷物を大使館車に預けたところで、大使館の派遣員さんが「出国の際の手順を説明しますからついてきてください。」と言う。我々の出国日は日曜日だが、どうも出国の際には



ヨハネスブルク空港の出発フロアに並ぶ土産物屋街



派遣員さんは同行してくれないようだ。不安がよぎる。で、派遣員さんについて空港の出発ロビーにつながる入り口を入ろうとすると、その入り口の扉の上に何か金属プレートが貼られている。何気なく見上げて驚いた。なんと、「Enter at Own Risk」と書かれている！ いたずら書きではなく、しっかりした金属プレートに刻印されている。こんなものをわざわざ掲示してある国際空港なんて初めて見た。直訳すれば「自分のリスクで入れ」だが、派遣員さんに「こりゃ、いったい何のまねですか？」と聞いたら、派遣員さん、しごく当然という顔をして、「ああ、これですね。」と言う。この中であなたの身に何が起こっても当局は一切責任を持ちません、ということなんですよ、と平然とした顔で解説してくれた。南アフリカではショッピングモールの入り口なんかにこの表示があるそうである。おそろしい国だ。でもおもしろそうだから四部長室のドアの上にも貼ってみようか、などと思ってしまう。

どんなリスクが待っているのかとおそろおそろ空港の中に入り、2階の出発フロアに上がると、中は広いがなんともごちゃごちゃしている。脇を見ると、人が大勢並んでいて、自分の荷物を透明ラップの巨大なものでグルグル巻きにしてもらっている。以前、フランクフルトの空港でも見たことがあったので、派遣員さんにこれは何をしているのですかと尋ねたところ、アフリカでは機内預けの荷物が頻繁に開けられて品物が盗まれる被害が起こっているため、荷物を開けにくくするために透明ラッ

プでグルグル巻きにするんだそうだ。もちろんラップは破ることは可能だが、そういう手間をするくらいなら何もラップを巻いていない荷物をねらうだろう、ということでみんな巻いてもらうとのこと。手荷物1個につき20〜30南アフリカ・ランド(300円〜400円ほど)でやってくれるそうだが、日本などではまったく見かけないサービスである。国の事情によっていろんな商売のネタがあるものだ。

通関の話も興味深い。ヨハネスブルク空港ではこの2ヶ月ほどの間に通関申告書が廃止され、入国者全員が手荷物の検査を行うことになったとのこと。聞けば、通関申告書にはビデオとかカメラなど高額な携行品はみな書き込まなければならないことになっていたところ、プレトリア市内などで強盗が押し入った現場に通関申告書が落ちているという事件が多発し、あるいは空港からの途中の道路で待ち伏せしていた強盗が通関申告書に書かれたのとまったく同じ物品名をいちいち挙げて「出せ！」とせまるような事件が多発するに及んで、どうやら空港の通関関係者と強盗が裏でつるんでいて、通関申告書で高額な物品を書いた人を集中的にねらったり、通関申告書に書かれた住所をたよりに強盗に入ったりするのではないかとの疑いが浮上、外交団が南アフリカ政府に改善を申し入れたところ、通関申告書の提出制度が廃止されて、その代わりに入国者全員が荷物の検査を受けることになったとのこと。とんでもない話だ。いやはや、空港とはかくもおそろしいところだったのか……。



ヨハネスブルク空港内の通路の壁に描かれたかわいい絵画



ヨハネスブルク空港の空 空の青さが濃いように思った

ホテルからは一歩も出るな

出発前にもらったアドバイスの中に「ホテルに入ったら絶対に一歩も外に出るな、昼間でも5分歩くうちに必ず強盗に遭う」というのがあった。特に南アフリカのヨハネスブルクは「世界最悪の犯罪都市」だそうだが、首都プレトリアもどんどん治安が悪くなってきているとのこと。

で、素晴らしい青空の下、大使館員の案内でプレトリアのホテルに入ったが、レセプションは小さく、1階ロビーも4人かけたらいっぱいになるようなソファセットが1つだけ。絵はがきを売っているような売店すらなく、ホテル内のレストランは1軒のみ。ビジネスセンターも狭い。プールやフィットネスクラブのような施設も見当たらない。なんととても簡素なビジネスホテルのようである。大使館員からは、事前情報どおり、危険だから絶対にホテルから一歩も外に出ないでくださいとくどいように言われた。見れば、ホテル前にセキュリティー会社から派遣されたガードマンが3人ほど立っている。すぐ隣のビルの1階にカフェらしき看板が見えたが、そこまでのわずか10メートルほどの距離も絶対に歩いてはいけません、とのことだった。外はとてもよい天気、ホテルが面している通りは片側2車線の広い車道に歩道が併設されており、街路樹が作る日陰と木漏れ陽は平和そのものの風情で、現地の人々が普通に行き来しているだけなのだが……。

のちほど、街は平和そのものにしか見えないのですが本当に危険なんですか？と現地に住む人に聞いたとこ



プレミア・ホテルの屋上から見たプレトリア市内

ろ、サファリ・パークに喩えて次のような話をされた。サファリ・パークの中に車で行くと、ライオンたちはこれは襲えないと思ってのんびりしているから、まさに平和そうに見える、ところが平和そうだからと車から一歩外に出るとライオンが襲ってくる、それと同じだと考えてください、だから車から降りてはいけません、とのことだった。なんとなく納得する。しかし、ホテルの前を歩く人々は何度見ても温厚なシマウマのようにしか見えない。

日本を出る前に読んだ情報では、ホテルからは一歩も出られないものの、ホテルに隣接したショッピングモールは武装警官に守られているから安全、とのことであったが、あらためてプレミア・ホテルを見回しても隣接したショッピングモールなんてものはどこにもない。先に述べたように、たいていのホテルにある絵はがきとか小物を売っているような売店すらない。外は相変わらずの良い天気である。これが他の国であればフラリとホテルの外に出て街の雰囲気を味わうところなのだが、とにかくあれだけ危険だ、絶対に出るなと言われると、公務出張中の身で事件に巻き込まれるわけにもいかず、それできない。ホテルの室内にはテレビがあるが、日本の放送はおろかBBCもCNNも映らない。だから、とにかくホテルに送り届けられてしまうと何もすることがなく、自室に籠もって文字通り「お休みする」しかなかった。

ザンビアのルサカ市も乾期が始まっていて天気はすごくいいし、空港からホテルに向かう道はたいへんのどかなので、大使館の派遣員さんに、ホテルに着いたら外を



プレトリアで宿泊したプレミア・ホテルの前の通り(右手がホテル入り口)



散策してもいいですかと聞いたところ、驚いた顔をして、ホテルから外には絶対に出ないでくださいと言われた。夜は当然として、昼間でも危険とのことである。日本を出る前に資料を読んだところでは、ザンビアは今回の出張先の中では治安的に一番安全と認識していただけに、これには驚く。やはり公務出張中に何か事件に遭ってはまずいという配慮から安全サイドのアドバイスをくれただけかもしれないが、とにかくアフリカ全体に治安が悪化していると言われている折り、むやみに歩き回るのは控えた方が良さそうだ。

アフリカの大地

今回の出張では南アフリカのヨハネスブルク空港からウガンダのエンテベ国際空港までの往復、また同じくヨハネスブルク空港からザンビアのルサカ国際空港までの往復でアフリカの大地の上を飛んだ。前者は片道4時間余のフライト、後者は片道2時間ほどのフライトであったが、毎回窓側の席を取ってずっと窓の下に広がるアフリカの大地を眺めていた。

まずはヨハネスブルク空港からウガンダのエンテベ空港へ。眼下に見える大地は、昔地理の教科書で習ったように、急峻な山はなく頭の丸っこい山ばかりで、古い大地であることがよくわかる。うねる大河、しかしどうも水は流れていないようだ。飛ぶこと3時間半、下にビクトリア湖が見えてきた。ビクトリア湖はアフリカで1番、世界でも3番目の広さを持ち、ほぼ九州2個分の面積に相当すると聞いた。ちなみに、資料を見ていたらウガンダから日本への主要輸出品に「鮮魚」と書いてあって、海のないウガンダにしてはおかしな話だと思っていたのだが、実はビクトリア湖で獲れる白身魚をフライにし、冷凍して輸出しているそうだ。フライの冷凍では「鮮魚」ではないと思うが、とにかく日本のフィッシュ・バーガーに挟まっているのは案外ビクトリア湖の魚かも知れない。ビクトリア湖畔には水浴もできるビーチもあるとのことだが、住血吸虫がいるので日本人は水に入らないとのこと。現地人は大丈夫なんだろうか。

ウガンダのエンテベ空港からヨハネスブルク空港に向かう時は、飛行機は20分遅れで出発した。旅行代理店の人の話によれば、アフリカでは飛行機の時間が大幅に遅れたり、欠航したりすることは頻繁にあるとのこと。欠

航したら2、3日は次の便が飛ばないということも珍しくないそうだ。幸いなことに今回南アフリカ航空の飛行機に4回乗ったが、せいぜい1時間の遅れ程度であった。

エンテベ空港を飛び立った時には外は激しい雨で、雨雲を抜ける間は飛行機が激しく揺れたが、ビクトリア湖を過ぎる辺りから雲が切れてアフリカの大地が見えるようになった。ウガンダではよく雨が降るという。水だけは豊富だそうだ。しかし、アフリカの内陸国でどうして雨雲が発生するのかと聞いたところ、雨雲は東のインド洋から来るとのことだった。ん？ 東から？ 天気は西から移ってくるという日本の常識は、赤道直下のウガンダでは通用しないのだ。

飛行機の日が当たる側とは反対側の窓から外を見てみると、雲の上に丸い虹のようなものが見える。飛行機の移動とともにその虹も移動していくのだ。どういう仕組みかは分からないが、飛行機の影が雲の上にできると、



夕陽の沈むビクトリア湖



上空1万メートルから見たアフリカの大地と丸い地平線



ヨハネスブルク近郊でよく見られる丸い模様 これは何？

その周囲に丸い虹ができるらしい。いわゆる「ブロッケン山の妖怪」と同じ現象ではなかろうかと気が付く。何度も飛行機には乗っているが、こんなものを見るのは初めてだ。

ヨハネスブルク空港に近づくにつれ、下を眺めると、そこかしこに丸い地形が見える。これはヨハネスブルク近郊だけで見たわけではなく、いろいろなところで見たから、アフリカではごく普通の景色のようだ。しかし、その実体は何なのかわからない。おそらくは円形に回る散水機を備えた畑なんだろう。円の直径は数十メートルはあろうか。

ヨハネスブルク空港からザンビアのルサカ空港までの景色もやはり同じようなものである。なだらかな丘が続

いたり、テーブルマウンテンが現れたり。そこかしこから煙が上がっているが、どうやら時期的に焼き畑ではなく、野火か煙草の火の不始末のようなもので草原が燃えているらしい。乾期に入っているため、一度火がつくとよく燃える。

アフリカの街並み

(1)ウガンダの首都・カンパラ

アフリカに行くに当たって相当に心配したのが蚊の対策である。蚊は黄熱病、マラリア、デング熱など悪い病気を媒介するから、なんとしても蚊は避けねばならない。しかし、ウガンダに到着し、大使館の派遣員さんに聞いたところによると、田舎の方はともかく首都カンパラでは蚊は見ない、とのこと。その派遣員さん自身まだ着任して1ヶ月だそうだったが、蚊取り線香やスプレーをたくさん日本から持ってきたもののまったく使う機会がない、夜に庭でパーティーをやるような時は露出部分に蚊除けのスプレーを使う程度とのことであった。蚊がいらないというのはありがたい話である。また、治安も比較的良く、大使館には徒歩で出勤しています、とのことであった。どうも事前に聞いていた話と違う。

カンパラに住む日本人はどういうルートで日本から来るのですかと聞いたら、主にエミレイツを使うとのこと。エミレイツは関空からドバイ行きが出ているのでそれに乗り、次にドバイで乗り換え。ドバイからのフライトは



高度1万メートルから見たアフリカの大地



ルサカ国際空港周辺 高度は3000メートルくらいか



夕闇の中のウガンダ・エンテベ国際空港のターミナルビル



ウガンダ法務省登録サービス局5階の窓から眺めたカンパラ市内



ホテル・シェラトン・カンパラ前の道路 街路樹の上にはハゲコウの巣がある

エチオピアのアジスアベバでワン・ストップするそうだが、1時間の給油中は機内にとどまることができ、そのままエンテベまで来られるとのこと。エミレイツは料金が安く、機体は豪華で、荷物がなくなったことは今まで一度もないそう。今度アフリカに出張する機会があれば、エミレイツを使うのがよさそうに思う。

エンテベ国際空港に到着した日、空港を出たのは現地時間で19時を回っていた。外は真っ暗である。日本大使館の車で首都カンパラに向かう。カンパラまでは約40キロ、時間にして50分ほどだ。派遣員さんの話では、空港からカンパラに向かう道中は景色がきれいなんだということだが、真っ暗で何も見えない。右手にビクトリア湖があります、と言われても、とにかく真っ暗で何も見えない。なんか違うと思って考えてみたら、街路灯が全くないのである。エンテベ国際空港から首都カンパラに至る街道は国内第一級の幹線道路のはずである。しかし、街路灯は1本もなく、さすがに舗装はされているものの片側1車線で、バイクも走れば人も歩く。車はあまりスピードが出せない。

30分も走った頃、ようやくカンパラの郊外にさしかかり、街路灯も出てきた。しかし、この辺りまで来るとも

のすごい人と車だ。ウガンダの車は98%が日本車だという。その多くはトヨタ・ハイエースを使った乗り合いタクシーだ。首都の中心部には日本政府が贈ったLEDの信号機が何基あるとのことだが、とにかくどこもすごい渋滞。信号のない場所がほとんどで、車の間を大勢の人がハンドパワーで車を止めては横切っていく。その絶妙のタイミングはとても我々にはまねができそうもない。ようやく初めての信号機を目にしたが、停電なのか故障なのか消えていて、警察官が手信号で交通整理に当たっていた。

カンパラではお昼前の時間に1時間弱自由な時間ができた。大使館員から、ホテルの周囲でも歩いて街の様子を視察していただきたい、と言われる。来る前に聞いてきた「ホテルからは一歩も出るな」「5分歩かないうちに強盗に遭うぞ」ということはここカンパラではとりあえず心配いらないらしい。しかし、結果としてみれば、3カ国の出張の中で、徒歩でホテルから出られたのはこのときだけであった。思い切ってホテルから外に出てみる。外に出ると言っても、とにかく信号機がないので車道は渡れないから、広大なホテルを取り巻くように設けられているフェンスの外側の歩道を巡るしかない。

おもしろいことに、どこの都市でも見かけるノラネコやノライヌの類はまったく見かけない。代わりに、街路樹の上にでかいハゲコウ(頭の毛のないコウノトリ)がたくさん巣を作っている。頭上を飛びながら輪を描くもの、建物の屋根の上にとまって見下ろしているもの、羽根を

痛めたのか路上を歩き回るもの、その数といったらものすごい。街路樹も数メートル程度の高さであろうか、それほど高くないところに巣があるため、迫力がある。インドのニューデリーにはハゲワシがたくさんいて、日本大使館の庭の木にも巣を作って子育てしていたが、カンパラはハゲコウである。ウガンダ人が好奇の目で横を通り過ぎる中、珍しさにひかれて写真を撮りまくった。



ヨハネスブルク空港の近郊

(2)南アフリカの玄関・ヨハネスブルクと首都・プレトリア

南アフリカの玄関口であるヨハネスブルク空港から首都プレトリアまでは70キロほどの距離だが、片道3車線の広いハイウェイが整備されているため、何もなければ40分ほどでつける。このハイウェイの途中で賊が待ち伏せしているとのことであるが、空は真っ青に澄み渡り、一見すると平和そのものに見える。一体何処が危険なのかと思ってしまう。

プレトリア市内にさしかかると、あちこちに信号がある。赤信号で車を止めると賊がわらわらと襲ってきて金品を奪われるから赤信号でも止まってはいけないと聞いていたが、我々の乗っている車はけっこう赤信号で止まる。大丈夫ですかと聞いたら、まず昼間の幹線道路では大丈夫とのこと。ただし、幹線道路から1本入った通りで朝の9時という時間帯に日本人女性がスマッシュ・アンド・グラブ（赤信号で止まった車の助手席の窓ガラスをぶち破り、助手席に置かれたバッグなどを奪って逃げるといふ強盗。女性1人で運転している場合などに多いタイプだそうだ。）の被害に遭ったばかりとのこと。気は抜けない。ちなみに、赤信号のときに交差点を突っ切ると、自動の写真機が設置されていて違反車の写真を撮り、あとで罰金を請求してくるそうだ。これでは赤信号は止まらざるを得ない。一体どうしたらいいのか。答えは、赤信号が遠くからわかったら、止まらないでいいように徐行しながら進み、うまく信号が変わったところでさっと通り抜けるんだそうだ。

大使館車は多くの国では「CD」文字の入ったナンバープレートを付けている。これは外交団を表す「Diplomatic Corps」に由来するとか聞いたことがあるが、南アフリカの大使館車のナンバープレートには「CD」ではなく「DD」の文字が入っている。いずれにせよ、普通の国で



南アフリカ・プレトリア近郊のハイウェイ



プレトリア市内の赤信号 こいつに罪はないのだが……

あれば、大使館車というとそれなりに敬意を表してくれて得することはあっても損することはないから、「CD」ナンバーを付けられるのはありがたいことなのだが、南アフリカではかえってそれがあだになることがあると言う。つまり、ナンバープレートを見れば車に乗っている



南アフリカ大統領官邸



金の露天掘りをした残滓のボタ山のひとつ



大統領官邸前から見下ろした夕陽に染まるプレトリアの市街



ヨハネスブルク郊外 金の露天掘り鉱山のボタ山を上空から見たところ

のは外交官だと悪人にもわかってしまうから、金持ちだろうということで車のあとをつけられ、それで自宅に強盗に入られるケースがあるんだそうだ。こんな話はほかの国では聞いたことがない。

プレトリアやヨハネスブルクは盆地のように窪んだ地形のところに広がっているんだそうだが、その盆地の周辺の傾斜面のところにダイヤモンドやプラチナや金の鉱脈が露出しており、そこで露天掘りが行われているんだとのこと。プレトリア市内でも適当に穴を掘っていけば、何かの鉱脈に当たるのかもしれない。ちなみに、現在ヨハネスブルクで地下鉄工事が行われているそうだが、ヨハネスブルクの地下の岩盤は非常に堅くて難工事なんだそうだ。となると、プレトリアでも穴を掘るのは簡単ではないか……。

ヨハネスブルク近郊を走っていると黄色っぽい色をし

た巨大な台形の砂山をいくつも見る。底辺の一边が1キロくらいあろうか、高さは数十メートルほど。何なのかと思って聞いてみたら、これは金の露天掘りの残滓を積み上げた、いわばボタ山だとのこと。それにしてもすごい山だ。それだけヨハネスブルク近郊で金の露天掘りが行われてきた証である。最近では掘り出した金鉱石から金を抽出する技術が向上したとのこと、これらのボタ山は過去の技術で金を抽出したあとの残滓なので、最新の技術を使うと過去には取り出せなかった金をさらに絞り出すことができるんだそうで、それが採算に合うくらいの技術が得られて、また新しい事業を興しつつあるとのことであった。

南アフリカでダイヤモンドが見つかったのは、河原だったそうだ。その河が隣国ナミビアの海に流れ込んでいるため、長年の作用でナミビア沖の海底にはダイヤモ

ンドが転がっているし、またナミビアの浜辺にはダイヤモンドが打ち上げられているとのこと。もちろんナミビアの沖合では早くから浚渫が行われているし、ナミビアの浜辺は立入禁止にされているそうだから、今から一攫千金をねらってナミビアに行ってもしょうがないらしい。帰国して2、3日後のニュースだったろうか、ナミビア沖で作業していた浚渫船が昔の難破船を見つけて金貨を引き上げた、と報じられていたが、どうもナミビア沖にはいろいろなお宝が眠っているようだ。

プレトリアから南十字星が見えますかと伺ったところ、地平線近くに見えるが、プレトリア市内では街の灯りのせいで見えにくいとのこと。隣にもっと明るくてわかりやすい「にせ南十字星」というものもあるそうだ。少し高いところの方が見えやすいだろうとのことだったが、ホテルの自室の窓から見えるのは残念ながら隣のビルの



南アフリカ・産業貿易省が入っている建物



南アフリカ・科学技術省の建物

壁だけだった。少し郊外に行くと満天の星が見えるんだそうだが……。

南アフリカには特有の握手の作法がある。教えてもらったところによると、3ステップからなるその手法は、まず普通に握手する、そのまま親指の付け根を密着させたまま手のひらを回転させ、互いの親指の付け根を押しつけ合う、最後にもう一度元の形に戻して普通に握手、というものだ。これを、チャッ、チャッ、チャッとリズムカルにやる。南アフリカ人に会ったら試してみると喜ばれるはず。ただし、ウガンダやザンビアではこのような握手は見られなかったから、南アフリカ特有のものと思われる。

(3) ザンビアの首都・ルサカ

ザンビアの首都・ルサカにあるルサカ空港は、国際空港とは言え小さい空港で、メインビルディングは2階建て、飛行機と結合するブリッジ施設は全くなく、飛行機は空港ビル前に駐機し、タラップを降りて歩いて空港ビルに入る昔ながらのスタイルだ。この小さいルサカ空港に、我々の南アフリカ航空の飛行機とほぼ同じ時刻にザンビア航空、ケニア航空の飛行機も到着したため、それら3機の乗客が一斉に入国審査に殺到、入国審査場は大混雑となった。

入国審査を抜けたところにある機内預け荷物の受取り場也大混雑。ターンテーブルは小さいものが2基あるだけだが、同時に飛行機3機が到着しているから、どこに出てくるか明示もない。自分は荷物を全て機内に持ち込んだからいいが、福田君はハードケースを1個、機内預



ザンビア・ルサカ国際空港に到着した南アフリカ航空機



ルサカ空港からルサカ市内に向かう道路



ルサカのタージ・パモジ・ホテル 既に秋風が吹いてプールは入れないが

けにしている。これがなかなか出てこない。いよいよ、アフリカでは機内預け荷物が無くなるという話が現実化するのかと心配させたが、しばらく待つてようやく無事に出てきた。一安心だ。

ザンビアでは空港はもちろん、公共施設の建物などを写真に撮ることは厳重に禁止されているとのこと、このめずらしい光景を写真に撮りたかったが、我慢して車に乗り込み、空港をあとにする。

車はそれほど多くはなく、道が混雑している様子はない。信号機もあるが、ほとんどは交差点部分に英国流のサークルを作っており、スムーズに流れていく。そのうちのいくつかは日本の無償援助で整備したものだそうだ。ザンビアもウガンダと同じく99%は日本車だそうで、またトヨタ・ハイエースを使った乗り合いタクシーも同じだ。

ルサカでの宿泊ホテルはタージ・パモジ・ホテル。その名が示すとおりインド系のホテルだ。アフリカの東海岸には昔からかなりインド人が進出していることは知っていたが、こんなところにもインド資本が入っていると知って驚く。ホテルのロビーを見ていると、インド人もいるが日本人がけっこう目に付く。ビジネスなんだろう。ウガンダでも南アフリカでもホテルでは日本人を見かけなかったから、なんとも不思議に思う。

ザンビアは、日本ではあまり知られていないがエメラルドやアクアマリンがとれるんだそうだ。しかし、インド商人に原石を安く買っていかれてしまい、少しもザンビアが潤わないんだとのこと。エメラルドと言えば南米

でとれるものだとばかり思っていたが、ザンビア人に聞いたら、コロンビア産に比べてザンビア産のエメラルドは緑色が濃いなそう。

宿泊したホテル内には普通の売店のようなものはなかったが、ただ1軒、宝石屋が店を構えていたので、ホテルに戻った後、頼んでザンビア産のエメラルドを見せてもらった。店主はどうやらインド系だ。現物を見た結果は、たしかに日本で見かけるエメラルドよりは色が濃い、かつてインド在勤時代にインドの宝石屋で見たエメラルドはみんなこの色だったと思う。日本にはコロンビア産のエメラルドが入っているが、インドで売られているのはザンビア産のエメラルドということか。

また、コーヒーも美味しいものがとれるが、商売が下手なのもうけがあげられない。コーヒーは白人が現地人を使ってプランテーションを始めたとのこと。もともとザンビアにはコーヒーを飲む習慣はなく、旧英領の常として紅茶が飲まれていたんだそうだが、ここのコーヒーの最上級のは手摘みだそうで、雑味が無くとても美味しいそう。ただ、せっかく土地も豊富にあるのに大規模なプランテーションまでは行われず、またパッケージも人目を引くようなものでないため商売に結びつかず、もったいない話だとのことであった。やはり、独自ブランドの立ち上げとパッケージデザインをなんとかしなければ、という話になる。これは知財にも絡む問題だ。

ルサカ市内には高層ビル（と言っても10階建て程度だが）が2棟しかないんだそうだが、経済産業省の入ってい



ザンビアの伝統的住居(レプリカ)

る建物はそのうちの1つとのこと。その建物は、ウガンダの外務省や大統領官邸の建物と同じように、中国政府が無償援助で建ててザンビア政府に提供したものだそう。中国はアフリカ諸国にかなり食い込んでいることが実感できる。経済産業省では9階(日本式で10階)で面談することになっていたが、玄関から入ってみると守衛さんが、停電でエレベータが止まっていますと言う。停電はしょっちゅうあるらしい。停電はいきなり発生していつ復旧するかわからないので、恐くてエレベータは使えないという話も聞いた。守衛さんがこちらにどうぞと言うので何か特別のエレベータでもあるのかと期待したら、階段を指し示され、これでお上り下さいと。ひえーと思いながら、とにかく階段を昇り始める。階段を昇るのは現地の人にもきついらしく、階段のそこそこで息を切らして休んでいる職員がいる。そういえば、ルサカは標高が1300メートルほどあるため、無理な運動はせず、よく睡眠をとるようにと資料に書かれていたことを思い出す。

ルサカ空港を出発する際には、2階の出発フロアにつながるエスカレータが故障で止まっていた。聞けばこのエスカレータは首都ルサカで唯一のエスカレータとのことだが、壊れていては仕方がないので、徒歩で横にある階段を昇る。ルサカは足の運動にはいいところだ。高層ビルもほとんどなければ、唯一のエスカレータも動かない、エレベータはあるが乗らない方が無難、いやはやのんびりした首都であった。

アフリカの現地の料理

出張となると、相手国政府の関係者を招いた食事会や打合せを兼ねた食事会のような仕事メシがほとんどとなるため、なかなか現地の料理を試す機会は限られてしまう。しかし、機会があれば、なんとか地ビールと現地の料理を試そうと努力してみた。

まず、ウガンダ。エンテベ国際空港に着いた時に大使館の派遣員さんに、ウガンダの特徴的な現地料理は何ですかと聞いたところ、しばし考えた後、「バナナの揚げ物」との答えが返ってきた。ただし、その原料とされるバナナは我々が日本で食べているようないわゆるフルーツバナナではなく、デンプン採取用の甘さのないバナナ

を使うんだそう。イモのようなバナナかと思い、それはサトイモのような食感ですかと聞いてみたが、それとは違うが何とも言いようがない、とのことだった。で、翌日の朝、ホテルのビュッフェスタイルの朝食で料理を見ていったら、揚げバナナがあるではないか！早速食べられるのはうれしいことだと思って、ちょっとどきどきしながら食べてみたのだが、甘みがあって、普通のフルーツバナナを輪切りにして揚げただけのものようだった。ニアミスである。残念なことをした。

次に南アフリカ。ビーフが美味しいと言われたので、ステーキハウスに行った。アフリカではどの国も自然に放牧して牛を飼い、オーガニック・ビーフを売りにして



ホテル・シェラトン・カンパラの朝食レストラン



いるんだそうで、ナミビア産のナミビーフ、ザンビア産のザンビーフなどが有名とのこと。なかなか命名が面白い。ちゃんとブランドとして確立させて日本に送ったらいいのと思う。ちなみにモザンビーク産のモザンビーフというのは聞いたことがないようだ。

南アフリカ産のビールを注文したら、アムスがあると言う。実際にオランダからの技術指導のもと、アムスという銘柄のビールを南アフリカで作っているそうだが、それを地ビールとして飲むのはちょっと悲しい。仕方なくナミビア産のビール・ウィントフック (Windhoek) を飲んだ。ウィントフックとはナミビアの首都の名前だが、このビールはアルコール度数が4%と低く、軽くて飲みやすかった。

前菜はオーナーシェフの勧めに従って、スプリングバック (びよんびよん跳ねる小型の鹿の仲間) の肉のカルパッチョ、牛肉のカルパッチョ、南ア特産の乾し肉のサラダをいただく。スプリングバックの肉はくせもなく、たいへんおいしかった。牛肉のカルパッチョよりもおいしいと思う。乾し肉も味が濃くておいしかった。メインにはフィレステーキを注文したが、柔らかくて実においしかった。ワインは当然に南アフリカ産の赤ワイン。南アフリカでしか採れないというブドウの種類を使った赤ワインがあるが、と言われたが、味を聞いたら正直なところあまりおいしくないと言うので、ありきたりのでもおいしいのにしてもらった。試してみても良かったかちょっと心残りではある。

なお、プレトリア市内には日本食レストランが2軒あった。いずれも仕事メシで使ったが、プレトリアでは食材はだいたいのが揃うとのこと、料理は普通においしかった。ウガンダのカンパラとザンビアのルサカには日本食レストランはなかった。

最後にザンビア。ホテル内のカフェで夕食をとることにして、まずは現地のビールはあるかと聞いたら、モシ (MOSI) というのがあるとのこと。MOSIとはどうもザンビアの貴重な観光資源であるビクトリア滝にちなむ名前らしい。自分は「違いがわかる男(古い!)」ではないので、ビールの違いが説明できないのが残念だが、とにかくけっこうおいしい。付け合わせでバスケットに入れたパンが届けられたが、これがまた日本のパンのように柔らかく、甘みがあっておいしい。こんなパンが海外で、しかもザンビアで食べられるとは思わなかった。

料理は、「ザンビア料理」としてメニューに載っていたチキンシチューを注文してみた。メニューには「ザンビア料理には、ナシマカライスが付きます」と書かれていたため、ウェイターにナシマとは何か?と聞いたところ、ザンビアの伝統的な主食だとのこと。小麦粉で作られているというから、何が出てきたとしても食べられないものじゃないと思って迷わずナシマを注文する。チキンシチューはケチャップ味の、普通に目にするチキンの煮込み料理とほぼ同じだ。骨付き肉が3切ほど入っている。問題はナシマだ。これは一見したところ丸い真っ白な蒸しパンである。しかし、食べてみると、味は何も付いていないし、特に中心部分は水分が多くベチャッとしている。それでいてなんとなくモチモチした食感だ。それにほうれん草の煮込みのようなものが添えられていて、それをつけて食べるらしい。まずくはないが、全部は食べられなかった。

最後に

4月というと南半球は秋である。訪問した都市はいずれも標高が1300メートルから1700メートルと高いこともあり、既に秋風が冷たくも感じられた。赤道直下のウガンダの首都カンパラ市も、標高が高いおかげで気温は年中20数度と安定しているそうである。ヨハネスブルクやプレトリアは5月になればフリースやセーターなどが必要になるとのこと、またザンビア人はルサカは天然のエアコンディショニング・シティです、と言っていた。アフリカと言えば暑いところというイメージはけっして当たらない。どこも素晴らしい天気で、気持ちの良い旅であった。本当に治安の問題が残念でならない。

今回のアフリカ出張では各国で多くの方々にお会いした。我々が会った人たちは、みんな心の温かな善い人たちだったし、それぞれが自国のために思い、しっかりとしたお仕事をされていた。特に各国特許庁の関係者は、皆さん、自国の知財問題をなんとか解決しようと頑張っておられる様子がひしひしと伝わってきた。今年度、日本特許庁がWIPOにアフリカ・ファンドを創設した。いよいよアフリカの知財分野でのキャパ・ビルに我が国も本格的に取り組んでいくことになる。素晴らしい成果がもたらされるよう、心から願う次第である。



ウガンダ法務省登録サービス局 キョムヘンド局長と



ザンビア知財登録庁 バンダー・ボボ長官(中央)一行と



南アフリカ貿易産業省にて 後列右の女性が企業知的財産登録庁のパトリシア課長

profile

櫻井 孝(さくらい たかし)

昭和53年4月 特許庁入庁(審査第五部電気)
 昭和57年4月 審査官(審査第五部制御発電)
 昭和58年4月 機械情報産業局産業機械課
 昭和60年4月 審査官(審査第五部映像機器)
 昭和63年10月 審査官(審査第三部動力機械)
 平成2年4月 在インド日本国大使館一等書記官
 平成5年4月 審査官(審査第三部動力機械)
 平成6年7月 調整課 調査班長
 平成8年5月 調整課 審査企画官
 平成9年7月 (財)知的財産研究所 研究部長
 平成11年4月 電子計算機業務課 機械化企画室長
 平成13年1月 審査監理官(四部インターフェイス)
 平成13年12月 国際課長
 平成16年7月 上席審査長(四部映像機器)
 平成16年10月 首席審査長(四部電子商取引)
 平成18年7月 調整課長
 平成19年7月 現職